キリスト信仰における黙示文学的表象の意義

名木田　　薫

岡山理科大学教養部

（1989年9月30日　受理）

（一）

まずパウロにおいて黙示文学的表象の現われている個所につき考えておきたい。彼は古い時（Äon）の終りを意味するところのよみがえりと裁きの前の時という表象を当時の類例の文献と共有している[1]。即ちRöm 8：38 f に示されている如くキリスト者達は来たるべき時において救われることを確信しているのであり，そしてそういう時の到来する前の時としての現在の時はただそういうものであるのではなくて，彼にとっては現在が既にそういうメシアの国であるのである。メシアと共に至福に生きる時というものが単に将来的ではなくて既に現在化しているのである。古い時と新しい時との間の中間の時というものが既に現在の中へ入れて考えられている。このように現在の時の中へ入れて考えられた中間の時としての現在の苦しみの経験から苦悩が頂点に達した後に人の子が来るという表象を彼は導入したとも考えられる[2]。人の子としては再臨のキリストを考えることができる。そしてこういう黙示文学的表象の修正は彼が自分の存命中にさえキリストの再臨があるかもしれぬと考えていたこととも合致している。彼は「時の満ちるに及んで」（Gal 4：4）と述べているが，こういう考え方も先の彼の考えを反映していよう。こういう表現も4 Esr 4：37が示す如く黙示文学的と考えられる[3]。なお彼においてもユダヤ的黙示文学においても時（Äonen）の重畳（Übereinander）という表象の存在は証明されえずキリストの復活と再臨の間の時はまだなおどちらかといえば古い時に根本的には属していることにかわりはないのである[4]。だからこそ又この世のことに深入りしないことを彼は勧めているのである。1 Kor 7：26ffにおいて説かれている。ここでの彼の言葉のうち厳密に考えるならばV.26～29a のみが黙示文学的とされる[5]。又再臨という如き事態が突如として予告なしにやってくることについては1 Thess 5：2fが示す。この句についても黙示文学的表現と考えられよう[6]。思うに黙示文学的表象というものはそれ自体が自己目的ではないとしてもキリスト信仰には不可欠と思う。人の心がイエス・キリストへの信仰によっていかに世の束縛から自由になったにしろ，真の自由のためにはそうなった人の心がより大きな積極的な大義の中へといわばのみこまれてゆくという契機が不可欠と思われる。そういう契機と天地万物の更新，身体のよみがえり等の終末的表象とは不可分なのである。人は二人の主人には兼

ね仕ええないが，逆に唯一人の主人もいないのでは，人の救いにとって不十分ではないかと思われる。

次に，たとえパウロが黙示文学的表象を用いていてもそれ自体に特に重い価値をおいてはいないことについて。「いつも主と共にいるであろう」（1 Thess 4：17）と表象している。この一言は彼の考えている来たるべき世が単に超世界的，超宇宙的な，いわば空想的なものではなくて，極めて現実的に観念されていることを示す。先述の如き神による大義への参与の表明という根本的性格を有しているのである。決して終末の如きことへの個人的こだわりが残存している如きことを意味するのではない。終末へ心が依存していればある種の囚われが残っているのである。例えば天国へゆくとか終末において誉れを受けることへの期待が不可欠というのでは現在における救い，自由というものが不完全であることになろう。現在での救いが完結的たるにはそういうものはこういう意味で現在の救いの契機として入ってきてはいけない。このことと先述の大義へのみこまれることが自由のより完全な実現ということとは何ら矛盾はしない。たとえそういうものがなくても人の自由は自由として完結的でありうるであろう。むしろない方がより完結的という考え方も存しうるのである。終末信仰の根本には神が神となる，丁度イエス・キリストの出来事においてまず神が自ら義となった（Röm 3：26）ように，という事態が存しているのである。終末の表象はこういう観点から理解せねばならないであろう。人がこの世の思い患いから救われるだけのためなら，イエス・キリストの死・復活への信仰で必要かつ十分とも言える。終末信仰はあえて必要ではない。終末信仰に限らずイエス・キリストの出来事への信仰は見方によっては，ある種の囚われと言えなくもない。しかしこの囚われは他の一切からの自由を意味している。かくてその囚われは実は囚われではもはやないことを意味している。囚われでありながら囚われではないのである。

さて，黙示文学的表象自体に価値があるわけではないことは，信仰の中心がイエス・キリストの出来事にあり，将来の出来事も今既に啓示されていることに対応している。つまり人は既に現在において終末の出来事について知らされているのである。ただそれを言葉で表現しようとすると，黙示文学的表象とならざるをえないのである。従って事柄自体の現実性は例えばパウロの書翰の中で最初に書かれたとされる1 Thess のうちで4：13ffに，更には1 Kor 15：51，Röm 11：25ffにおいても表現されている。これらの個所のうち例えば1 Thess のものについてであるが，P.ジベルによると，V.16以下の言葉はV.15の下に位置づけられているとされる[7]。従ってパウロは主の言葉の黙示文学的描写自体に関心があるのではないのである。テサロニケの教団にとって疑問となっている希望を確かなものにする助けとなる点に黙示文学的出来事の意味を見ているとされる。又1 Thess 4：14における「イエスと一緒に」（σὺν αὐτῷ）とV.17の「彼らと共に」（σὺν αὐτοῖς）という συν を使った表現は相互関連しており，パウロの黙示文学的証言の解釈にとって大切であり，これらの個所は共にイエスの復活から将来的なことが見られる構造になっている[8]。つま

り将来論自体に重点をおいてそこから発想するという形でそういう黙示文学的表現がなされてはいないのである。更に又1 Kor15：23ffにおいて終末の時の出来事について詳しく述べているが，H.-H.シャーデの研究によるとメシアの国という表象はここでパウロが詳論している目標ではなくて前提であると考えられている[9]。つまり黙示文学的表象はメシアの国の到来というものへの信仰があって初めて生まれてきていることを意味している。従ってその到来というもの自体が価値を有しているのである。当然と言えば当然のこととも言えるかと思う。イエス・キリストの復活への信仰から終末におけるキリスト者の復活への信仰も開かれてきているのである。この点については例えば1 Kor 6：14においてもパウロはただ「わたしたちをもよみがえらせて下さるであろう」というのみで，そのよみがえらせ方については具体的には何も述べていないのである。更にRöm 8：11においても「あなたがたの死ぬべきからだをも生かしてくださるであろう」と言うのみである。これらの個所において彼は黙示文学的表象による表現をしてはいないのである。終末的希望はイエス・キリストの出来事に由来するので，彼はその具体的形については知らされてはいないのである。その出来事が基礎にあればこそ既に死去した人と今生きている人との間に扱いの差異はない。なぜなら霊が既に働いていてそこのところから将来が見られているからである。具体的表象としてはパウロが描いていない個所があるということは，人にはまだ終末は十分には具体的に知られていないことを意味する。人は有限な知的能力しか所有していないのだから当然である。「やがてわたしたちに現わされようとする栄光に比べると」(Röm 8：18）と告白されている。今既に人に分ってしまっているのなら，その分っている程度のことしか神は「栄光」として用意していないことになってしまうであろう。神と人との間には，知的能力でも人格的資質でも無限の開きがあるのだからこのことは当然である。かくて終末の事態を現在の人間の知的能力に合致する如き仕方で知らせること自体がそもそも不可能であろう。イエス・キリストの出来事すら人にとっては躓きの石となりかねないのに終末のことをいわば直接的に伝達するのは正に不可能である。無限の可能性あるものについては現在の人間にはその内容が知られえないものとしてそういうものの存在が知られるという仕方以外に知られようがないであろう。従ってパウロにおいてそういうものについての表象自体に重点がおかれていないことはいわばいわゆる非神話化がなされていることだとも考えられよう。黙示文学的表象なしの信仰こそ現代の信仰としてふさわしいと言える。なぜならそういうものをいわゆる神話として描くことは現代人の知性にはもはや不可能だからである。これに対し神秘主義などは神性，或いは神的対象について種々具体的なイメージを描いている。これこそ，即ちそういう具体的表象があることこそ人の力のなせる業という他ないのである。正しく自我の延長線上の活動と言えよう。新しい世界の到来を不思議に感ずるのは，そういう世界を現に見ている世界と同じ仕方で具体的に思い描こうとするからではないかと思う。具体的形のものとして考えなければその分だけは少くとも不思議と感じないであろう。現在の世界が目に見えて具体的であるので，それ

に応じて具体的に考えようとするからであろう。そこで却って余計に新しい世界を不思議に思ってしまうのであろう。その上人はこの現世において生きよう，生きようとしているので，この世がそのまゝ持続するのを望むことにもなり，別の世界の到来という事態については荒唐無稽の如く感ずるのであろう。そのように感ずる事柄の一つに身体のよみがえりというものがある。ユダヤ的文書（Philo, Sapientia etc）では，復活なしでの人格の核心の不死性という表象も主張されてはいるが，黙示文学の伝承においては復活についてはからだが変えられた身体性として考えられている（e.g.Dan 12：2，13，1 Hen 62：15 etc）[10]。パウロも霊のからだと言う（1 Kor 15：44）。しかしそれ以上具体的には規定していないのである。尤もこの霊のからだ（σῶμα πνευματικόν）という規定が果して規定という性格を有しているか否か既に疑問であろう。肉のからだに対して対置されているのみでその内容については何ら明瞭ではないのである。パウロ自身さえもそれがどういうものかについて明確に知っているとは言えないであろう。

ところで，パウロにとってはイエス・キリストへの信仰による救いということが中心テーマである。従って黙示文学的表現が現われているところにおいても，「人の子－キリスト論ではなくて，その終結的行為としてのキリストの支配の下へ再臨を関連させることが決定的なことである[11]」。今，現に目に見ている世界について主の再臨を考えることが不思議に思えるのは，人が当時の宇宙観というものについて知り，それと現代のそれとを比較するからということもあろうかと思う。もし人が後者のみしか知らなかったらそういうこともその分生じにくいであろう。なぜなら比較することによって再臨は古い宇宙観と一体的なものだとしてそれを斥けようとすることにもなるからである。しかしこの点についてはそうではなくて，両者は無関係だと思われる。再臨はイエス・キリストの出来事と関連しているからである。再臨という信じ方は古い宇宙観なるが故に可能であったとの判断は人の罪から起因しているかと思う。何かある特定のこと－これは具体的には各人の人格によって異なるが－によって現世と人の心とがつながっているという事実があるので，心が現世から離脱し切れないのである。そういういわば原事実が人にこの可視的世界から心を離すのを妨げているのである。そこでそういうある特定のことさえ失なわれれば自ら心も現世から自由となる。その結果再臨についても，それを現在の世界との関係において考え矛盾しているが如くに感ずることもなくなるであろう。結局何かある特定の事柄によって人の心が現世へつなぎとめられているという事実が再臨信仰の障害になっているのである。そういう意味では再臨が信じられるか否かは人の心が罪から，世から自由か否かの試金石とも言えよう。また見方を変えると，パウロのキリスト信仰は地上へ受肉したイエスへのキリスト信仰なのであるからグノーシス主義における如き思弁的性格のものではない。例えば1 Kor 15：45ffにおけるアダムとキリストとを比較対称した考え方はユダヤ教における黙示文学的，知恵文学的，ラビ的伝承の使用から説明されるべきものであって，決してグノーシス主義的な原人の神話から説明されるべきではない[12]。しかしただ単にそうだという

のではない。例えばRöm 4 : 17b を単に黙示文学的な原始時－終末時のシェーマの表現として解釈することは許されず，よみがえりは最初の創造の終末論的な反復としては解されえないのである[13]。終末はそれ自体独自な性格のものである。未だその詳細は人の知には隠されたまゝなのである。今は神の叡知の中に隠されている。終末というものは決して思弁的に考えられたものではなくて，イエスをキリストと信ずることと一体的なものである。人の現在の知には不可知なる故に，それを何らかの図式にはめ込む如き仕方で処理することは一般的に不可能と言える。むしろそれはそういう人間によるあらゆる処理の仕方を破る如きものである。不可知という事実にこういう一種の積極的意味があると言えよう。これに対しグノーシス主義では，創造と救済が符号し，かくて後者は「原始時（Urzeit）」的に考えられている[14]。一方，パウロでは救済というものは，創造との関連で考えられるのではなくて，根本的に新たなものとして終末独自のものとして観念されているのである。

このようにパウロにとっては，イエスへのキリスト信仰，つまり救済論がその中心であることは否めない。しかしこのことは決して彼にとって‘人の救い’中心的発想が支配的であるとの意味ではない。そういうことでは却って人は救われない。神による全宇宙的救済史の中へ組み込まれてゆくことのうちに人の積極的救いが存している点から考えても，救済論と神論とを決して別々に考えるわけにはゆかない。重要度に差をつけることはできない。このことはパウロが自己の歴史を神による救済史として語りうる（Gal 1 : 15）ことにも反映されている。これら二つの事柄は人の救いの二つの側面として一つの事柄である。例えばパウロは1 Kor 15:20〜28においてアダムとキリストとを対比しつつ述べている。そこではあたかも人の終末論的な救いが論述の本来の目的の如くに読まれうるのであるが，F.フロイツハイムによるとここにおけるキリスト論と人間論（救済論）とは神の終末論的な力の掌握のさし当たっての終末時的な表明と手段でしかない[15]。即ち1 Kor 15 : 20ffにおいてもその根底にはパウロの神論的把握があってのことだと考えられる。神による全宇宙的支配が人の救いという次元へと反映したものとして考えうるとの意味である。人の救いは全宇宙的救い，完成の一幕として解しうるのである。このことは大切であると思う。人の救いは神による摂理の中へ組み込まれてゆく点に存するのだからである。

（二）

さて，裁きということは救い，或いは選びということと連動している。後者なしには前者も又考えられないのである。逆に後者が宣べ伝えられている以上，前者のことも不可避的に生ずることなのである。例えば1 Thess 1 : 10において「きたるべき怒りから救い出して下さるイエス」と言われている。神の怒りという背景あっての救いということがはっきり示されている。従って救いとはただ単に人がこの現世における種々の束縛から自由になる，救われるとの意味ばかりではない。根本的にはむしろ神の裁きからの自由，救いというものが存しているのである。固よりこれら二つの事柄は内実的に関連していることは

言うまでもないことである。ところでパウロは「主の日」（ἡμέρα κυρίου）という表現を使っている（1 Thess 5：2，1 Kor 5：5）。更に又1 Kor 3：13においては「かの日」（ἡ ἡμέρα）と表現している。Röm 2：5では「怒りの日」（ἐν ἡμέρα ὀργῆς）という表現で神の裁きの日を表わし，悔改めのない心の人々はその日のために神の怒りをわが身につんでいるのであると判断している。なお主の日という言い回しはパウロでのみ見出され，更に又キリスト（イエス）の日〔ἡμέρα Χριστοῦ（/ηοῦ）〕という表現も専らパウロ的である（Phil 1：6，10，2：16）[16]。このキリストの日というのも内容的には主の日と同じことであり，神の裁きの現われる日のことである。一方，1 Thess 1：10，5：9において神の怒りの日について語るが，ここにおいてはパウロは彼以前の原始キリスト教の用語に関連して語っているとされる[17]。

ところで，裁きという事柄についてその意義を考える時，人間的側面と神自身における側面の二面より考えうる。まず前者についてみると，キリスト者としての実存，人格の完成とは元来神による裁きを含んでいるということ。このことは例えば1 Kor 3：10ffにおいてキリスト者が主の日の来る迄に行ったことについて主の日における火がためすとされている点にも現われている。無意義な仕事は火に焼かれて消失してしまうのである。他にも2 Kor 5：10，Röm14：10ffにおいて裁きが言われている。更に興味深いことであるが，1 Kor 4：5では「隠れていることを明るみに出し」と言われている。つまり神は隠れたことを知っていると理解されている。神の前にあっては何をも隠すことはできないのである。全知全能の神に対し隠し事はできぬ。神が隠れたことを知っているとの考えは1 Henに典型的に現われている[18]。つまりユダヤ的，黙示文学的発想より由来する考え方であろう。いずれにしろ神が人の心のすみずみまで知っているという考え方は神への畏怖と関連している。エデンの園においてアダムが罪を犯した後で身を隠そうとするが，結局は不可能であった。神が被造界全体を摂理していることの一端を示している。そしてこの隠しえぬという事態は人の倫理とも関連している。神が人の目には隠れたことをも知っているという確信の下での倫理と言えよう。しかしこれは恐れからの倫理というのではない。むしろ反対に主の日においては，他の人々には隠されている良き業に対して神から各々誉れをうけるであろう。（1 Kor 4：5）という信頼から由来する倫理といえよう。小さいことには小さい誉れ，大きいことには大きい誉れという信頼である。キリスト者に相応しくというと何かの基準があってそれに合わすというイメージが強い。しかしそういう基準は特にはない。イエス・キリスト以外に見本はない。どこまでも進むこともできる。そしてそれに応じて誉れをうけるとの考えである。誉れをうけるという考え（1 Kor 4：5）は主の日をいかにリアルに受け取っているかを如実に示しているのである。

次に，裁きに関しての神の側における意義について。まず裁きというものは個々のキリスト者に対してその行ったことについて裁くという単にミクロ的なことではないのである。神は裁きにおいて究極的に神たり給うのである。裁きにおいて先述の如くキリスト者の人

格，実存が完成されることに応じて神は神たり給うのである。人が人となることと神が神となることとが対応している。一つのことである。パウロがキリストにおいて人の罪を裁くことにおいてまず神が義たり給うたと言っている（Röm 3：26）が，主の日における裁きによって神は究極的に義となるとも言えるであろう。逆に言えば主の日における裁き以前においては神はその主権の発動をさしひかえているとも言える。神の義とは合致しない事柄をもいわば許容しているのである。だからこそこの地上においても，更にはキリストを信じているはずの教団の中においてさえも雑草がおい茂る如き事態も生じてくるのである。神の許容なしにこういう事態は生じえぬであろう。主の日において初めて神はその威厳を現わさしめるのである。Röm 3：5ffにおいて人の不義と神の義との関連を述べるに当たり，前者が後者をあらわにするのだからむしろ悪行をしようという不埒な考えをする人は罰せられると述べているが，こういういわば倒錯した考え方の批判の根底にも神中心的発想がうかがえる。思えば神の主権は自分自身以外のいかなる基準をも有してはいない。このことはヨブ記，イザヤ書における陶工の自由にたとえられている（Job 10：9，Is29：16）通りである。こういう主権の自由さは神がその怒りの発動をさしひかえる自由を有していることをも意味している。即ちRöm 9：22ffによると滅びの定めにある器をさえ神は忍んでいる。不義な者には滅びが当然の報いだが，少くとも一時的には神の義からのそういう裁定に対しても神は自由さを有している。かくて神は自分自身の怒りからも自由である。報復という思いによって神の裁きは貫かれてはいない。信賞必罰的発想によってはいないのである。このことは，福音書における労働者に対して払われる賃金の計算の話（Mt 20）にも現われている。この現世における人間社会の法則と同じような仕方での計算によるのではない。いわば神が神となる，神の主権発動の一契機として考えられている。神が自分以外のところで定められた何らかの規範に従ってただ裁くというのではない。神自身が規範そのものである。このような裁きにおける神の自由さは，パウロが自分達キリスト者の迫害者が地獄の火の中に投げ入れられるという如きことをどこにも述べていない事実とも符合する。普通に考えると，キリスト者を迫害する者は終末において裁かれるのが当然とも思われるが，先回りして裁いてはいけない（1Kor 4：5）という信念の下に人が人を裁くことはさしひかえている。神が裁きということから自由であるのに応じて，そういう神を信ずる人も又裁くという行為からの自由を有していると考えられるのである。

更に，人を裁くのはあくまで神であってキリストではないという点について。まず1Thess 1：10によると「きたるべき怒りから救い出して下さるイエス」と言われている。かくてキリストが自ら裁きを行うとは考えがたいのである。更に5：10によると「わたしたちが主と共に生きるため」とされている。キリスト者は主と共に永遠の生を生きるとされる以上，当のキリストがキリスト者を裁き滅びに定めるとは信じがたいことである。従ってキリストはあくまで裁き，滅びへと定める神の裁きから人を救う働きをする存在として観念されているのである。ところが，1Kor 4：4によると「わたしをさばくかたは，主で

ある」とパウロは告白している。つまりキリスト自身がパウロを裁くと思われているのである。しかしこの節のすぐあと（V.5）で彼は「神からそれぞれほまれを受けるであろう」と言う。こういう言表を考え合わせる時，V.4において裁くのは主であると言っていても，それは彼をキリストが裁いて滅びに定めるというのではなくて，ほまれを受けるために裁くとの意であることが分る。裁きの結果としてのほまれを受けることが予見，確信されているのである。ここにはキリストによる裁きへの恐れの如きモチーフは存していないのである。このことは，ここではコロサイ書の信憑性の問題には触れないが，「キリストの苦しみのなお足りないところを，わたしの肉体をもって補っている」（Kol 1：24）と告白したり，更に大切なことだが，「母の胎内にある時から私を聖別し」（Gal 1：15）と言っていることにも別の形で表わされている。このように最後の審判において自分が滅ぼされることはないと確信していたと思われる。これほどの召命感に燃えている彼が自分が本当に失格者になるかもしれない（1Kor 9：27）と本気で不安がっていたとは到底考えられないのである。彼が救済史を自己の実存の歴史として語りうることは自己の救いの確信あってのことである。こういう語り方に対応する事態として，終末をも既に現在において内的に体験している如き事態が存していると言えよう。既に今終末とも同時的なのである。「空中で主に会い，こうして，いつも主と共にいるであろう」（1Thess 4：17）との事態は既にリアルであるのである。又こういう語り方ができることは，神の救済史と自己の生き方が一体であることであり，そのためには当人が大なり小なり殉教という性格を有した生き方をしていることが不可欠であろう。キリスト信仰は元来宗教ではない。つまり人間の，人間による，人間のための宗教ではない。神の経倫のための宗教とでも言いえよう。神が神となるための宗教である。そしてそういうことの一環として人に対して啓示がなされたのである。

ところで，2Kor 5：10には「キリストのさばきの座」と書かれている。この句についても先述の1Kor 4：4fについての解釈からも分る如く決してキリスト自身がさばき主との意ではないのである。この点について，H.－H.シャーデによるとRöm 8：34において「神の右に座し，また，わたしたちのためにとりなして下さる」と言われていることと考え合わせると，人を裁くために神と並んで座っているのではないとされている[19]。キリストが裁き主として判決を下すとの考え方はパウロにはないと考えられるのである。先に挙げた1Kor 4：5においても「主は暗い中に隠れていることを明るみに出し，心の中で企てられていることを，あらわにされるであろう」とされているのみである。判決はキリスト自身が下すのではないのである。V.5ではかくて神とキリストとは役目を分けて考えられているのである。このことは，ユダヤ人たるパウロとして当然のことと思うが，彼が神への畏怖を有していることと同時に，キリストは仲保者であるから畏怖の対象にはなっていないこととを示していると思う。「キリストが，わたしのうちに生きておられる」（Gal 2：20）と言っていることから考えても，パウロとキリストとは既に一体であり，キリス

トは身近な存在である。V.4における隠れていることを明るみに出すといっても，V.5でほまれをうけるといっているのであるから，それはほまれの対象になる如きものであると考えられるのである。更に1Thess 5：2によれば「主の日は盗人が夜くるように来る」とされ，V.3の「突如として滅びが彼らをおそって来る」と考え合わすと，主つまりキリストはいかにもさばき主との印象をうけなくもない。しかしV.4によると「その日が盗人のようにあなたがたを不意に襲うことはないであろう」と述べている。又V.9では「わたしたちの主イエス・キリストによって救いを得るように定められたのである」と言う。このように主が裁くということではないのである。あくまでキリストはキリスト者の側に立つ存在として理解されているのである。更に1Kor 3：10ffによると，イエス・キリストという土台の上にキリスト者は各々建物をたてるのであるが，建てたものがたとえ立派でなく「かの日」(V.13) に火によって焼かれても人自身は救われるであろう（V.15）とされている。ここにおいてもイエス・キリストは人の救いの土台であることが言われている。その土台の上にある限り人は必らず救われるのである。その土台が人を裁くことなど考えられないのである。

（三）

さて，神による裁きについて更に考えておくべきことは，キリストの宣教はユダヤ人にはつまづかせるもの，異邦人には愚かなものである（1Kor 1：23）点である。つまりユダヤ人にも異邦人にも，即ち全人類にとってその自然的知性には理解をこえた事柄なのである。神はすべての人を罪の下にとじこめたと言われるように，罪という事実の下に人は全て平等である。人は全ていわば無神性を帯びているのである。そういう根源的性格を有している人類に対してキリストが宣教されることにより，信者と不信者という区別が生じてくるのである。召された者にはユダヤ人にもギリシャ人にもキリストは神の力，神の知恵なのである（1Kor 1：24）。ここに救われる者とそうでない者とへの人類の分割が生じてくる。そして前者は終末の日において救われるのに対して，後者は滅びに定められるのである。終末の時にはキリスト者がいわば落ち度のない者になるようにと祈っている（1Thess 3：1ff，Phil 1：9f）という事実は神が信者を完成して下さるようにとの祈りであるが，その反面不信者は滅ぼされることは当然前提されていると思う。不信者さえも救われてしまうのであればあえてこういう祈りをすることもないであろう。召された者は救われることが前提であり，だからこそ1Thess 4：1ffにパウロが勧めているように「いま歩いているとおりにますます歩き続けなさい」と言われるのである。不信者への裁きについていうと，1Thess 5：2fにおいても突如として滅びがおそうと言われている。信者は固より滅びより救われるのである。だから信者は自分のそういう存在に相応しく行為せよと言われるのである。1Thess 5：9にははっきりと教団は救われることが示されている。尤もこの句はH.－H.シャーデによればパウロ以前のものに由来する[20]と言えるので，彼

自身の思想にどこ迄深く根づいているか問題とも言えようかと思う。しかしたとえ由来がどこにあるにしろ現在当人にとって受け入れられていればこそそういう考えを告白しているのだからパウロの信仰自体に合致するものと考えてよいであろう。

特に教団外の敵対者の滅びについてはPhil 1 : 28においても述べられている。ここでは信者達をろうばいさせる者は滅びるとされている。パウロの言葉としてきくからこそ納得がゆくのであるが，キリスト者でありさえすれば誰でもそのように考えることが許されるというほど事態は単純ではないであろう。当時は現代に比すれば信者は少数であったと考えられるが，たとえそうであってもなおかつ雑草の茂る可能性は否定できぬからである。更に又興味深いことは，1 Thess 2 : 16においてユダヤ人に対して神の裁きが下ったことが言われていることである。こういう解釈はパウロがユダヤ人であること，又それ故に「肉による同族のためなら，わたしのこの身がのろわれて，キリストから離されてもいとわない」（Röm 9 : 3）と言っていること等を考えあわせると大変重要な点である。神の宣教は正に母と娘，父と息子の間を引きさくほどのものである（Mt10 : 35）からこそユダヤ人という同胞をも引きさくのである。1 Thess 2 : 15にはユダヤ人が信者を迫害したとしるされている。こういうことを思う時，現代の如くキリスト者と名告っても迫害は固より何の反響もない時代と違って信仰とは真に生命がけのことであったであろう。従って少くとも現代に比すれば純粋な信仰が教団の内に宿るより大きな可能性を考えることができるであろう。以上は教団外からの災についてだが，次に教団内での悪の種について。1 Kor 5 : 12 f によると，教団内での悪人を除いてしまえと言われている。外にいる人々についての裁きは神に任せよとも言われている。パウロ当時の教団はまだその勢力はさほどでなかったにも拘らず，内に既に悪の種が侵入していることが分る。迫害も何もない現代の如き時代においては教団と世俗の世界との区別すら定かではない。こういう状況にあっては逆の除去という事態さえ生じかねないのではないかと懸念されるのである。だがパウロの言う除去の目的は神の裁きの先取りではなくて，教団を清く保つことにあるのは言うまでもないことである。だからこそRöm 12 : 19によると「わたし自身が報復する」と書かれている。つまり人が人を裁くことは原則として許容されてはいないと思われるのである。こういう事実に対応する如くにGal 5 : 10では信者を動揺させる者は裁きを受けるであろうとされる。又2 Kor 11 : 15，この句は黙示文学的に表象されている[21]が，においては彼らの最期はそのしわざに合ったものとなろうとされている。つまりパウロは，これらの句が示すように，その裁きを神の手にゆだねているのである。決して自分が裁いてはいないのである。サタンの奉仕者と思われるほどひどい者に対しても自分が裁いたりはしていない。但し神はそういう者達に滅びの定めを与えるであろうとは信じているのである。その点に心の統一が保持されている。ここに神の御手に全てをゆだねて，一個の人間としてはいわば無我の心を生きているパウロの姿を見ることができるのである。他人を裁くのは原則としてやめ神にゆだねるというこのような態度と呼応して，キリスト者に対してはむしろ自己検証

することが勧められている（1 Kor 3：10〜17，Gal 6：1〜5）。お互い同志で裁き合うのではなくて，むしろ忍耐をもって忍び合うこと，又自己を反省することが勧められている。しかしこういう勧めと悪を除けという考えとはどのように調和するのであろうか。各人が自己反省をして自己の内からまず悪の種を除けということになるであろう。このことはイエスが「あなたがたの中で罪のない者が，まずこの女に石を投げつけるがよい」(Joh 8：7）と言っていることとも一脈相通じているであろう。そうすれば教団は自ら清く保たれることになろう。

以上（一），（二），（三）と終末及びそこでの裁きについて考えてきた。「悪を行うすべての人には，ユダヤ人をはじめギリシャ人にも，患難と苦悩とが与えられ」(Röm 2：9）とパウロは述べている。このことは信者と不信者，未信者との差別ではなくて，全ての人に対しての平等な扱いを意味している。人格神なればこそ当然のことである。だが一方でパウロは自分達を迫害する人々が地獄の火で焼かれるという如きことは述べていない。つまり自己中心的な裁きについての発想は欠けている。即ち人格主義的考え方をしつつもなお，そういうものからの自由をも合わせ有していると考えられる。しかし彼は「先走りをしてさばいてはいけない」(1 Kor 4：5）と言っているが，裁き自体がなくなるとは言ってはいない。各人が「キリストのさばきの座の前にあらわれ」(2 Kor 5：10）と言う。善であれ，悪であれ，行ったことについてその報いをうけるのである。キリスト者の中にもそうよばれるに相応しくない人々も或いはいるでもあろう。そういう人々を彼がそのまゝ許容しているとも思われない。復讐は私のすることと言われている（Röm 12：19）ように裁きは人の権能に属さぬのである。このように考えて初めてキリストと共に生きるであろうということを希望として受け入れることができよう。信仰とは名ばかりで実体のない人々まで無条件に救われるとも考えがたい。例えばカナンの地に入れなかった民は多いのである。いつも雑草がおい茂ってくる。Gal 5：22 f には倫理的実践の徳目が挙げられているが，このような行為の実行とこれまでに述べてきた如き広義での裁き及びその前提たるよみがえり等とは不可分一体のことと思われるのである。

注

1）H.－H.Schade：Apokalyptische Christologie bei Paulus 1984 S.96
2）ibid. S.96
3）ibid. S.92
4）ibid. S.94
5）ibid. S.101
6）ibid. S.98
7）P. Siber：Mit Christus leben 1971 S.57

8） ibid. S. 58
9） H.－H.Schade : ibid. S. 97
10） ibid. S. 205
11） ibid. S. 69
12） ibid. S. 83 f
13） F.Froitzheim : Christologie und Eschatologie bei Paulus 1982 S. 109
14） H.－H.Schade : ibid. S. 77
15） F.Froitzheim : ibid. S. 145
16） H.－H.Schade : ibid. S. 28 f
17） ibid. S. 37
18） ibid. S. 41
19） ibid. S. 41 f
20） ibid. S. 36
21） ibid. S. 54

Die Bedeutung der Apokalyptischen Vorstellungen im Christusglauben

Kaoru NAGITA
Faculty of Liberal Arts and Science,
Okayama University of Science
1-1 Ridaicho, Okayama 700 Japan

(Received September 30, 1989)

Es gibt die apokalyptischen Vorstellungen bei Paulus. Aber solche Vorstellungen an sich sind nicht hochgeschätzt. Der Glaube ist der an das Ereignis Jesus Christus. Daraus ist die Eschatologie geboren. Trotzdem bildet die Erlösungstheorie die Grundlage für die Paulustheologie. Dann müssen wir betreffs des Gerichts am Jüngsten Tag zunächst überlegen, daß Gott schließlich Gott werde. Sodann daßdie Persönlichkeit des Christenmenschen vollendet werde. Außerdem ist es nicht Christus, sondern Gott selbst, der den Christenmenschen richten wird. Christus wird am Gericht als Erlöser des Christen anwesend sein.